

淨なる本質とは、いかなるものだろうか。それは勝れた智慧によつて認識することが出来る。そしてその智慧によつて見るに、無自性で清淨なる本質とは平等であると法性品では説いている。

次に平等品で問題としていることは、法の本質である平等とはどうゆうことがあるいほどういう状態を平等というかということであり、それは次の様に説かれている。

平等とは彼此がないということであり、有無がないという事である。そしてこれが眞実の本質である。この二つの異つたものがないということが寂靜ということであり平等と寂靜は同義に使われている。また我々は差別見を持つてゐるため平等を認識することが出来ない、ところが勝れた智慧を持つことによつて差別見を捨てること出来る。故に平等と捨は同義に使われている。さらに法の本質である平等を正しく見ることによつて平等を認識することが出来る。故に平等と正見は同義に使われている。

以上の様に平等は眞実の本質、法の本質、仏敎の根源であり、また寂靜、捨、正見という仏敎の重要概念とも

密接な關係にある事が了解される。故にこれからは、さらに平等を精微に研究する必要がある。

「菩薩思想の研究」

真 田 康 道

菩薩思想の研究を卒論のテーマとした理由については既に論文の序論に於いて述べたのであるが、それは大乘菩薩思想の興起にともなつて大乘仏敎がどのように展開し、發達していったかということ、いいかえれば大乘菩薩思想より、大乘仏敎というものを私なりに理解し把握せんとするためであつた。大乘經典は紀元一―二〇頃一応成立したと考えられるが、これらの經典を編纂した人々が何を考え、何を主張せんとしたかをつかみとることにより、もつと我々に身近なものとして、生きたものとして理解しようと試みたいと考えたからである。従つて私は大乘菩薩思想の起源的方向より考察せんと、次の三つの章に分け、論述せんとした。即ち第一章「菩薩の起

源」に於いて、大乘菩薩の成立するまでの準備段階の考察、第二章「大乘菩薩の思想的展開」に於いて、大乘菩薩の思想上の特質、即ち菩薩の六度や誓願思想等についてのその起源的考察。次いで第三章「菩薩の興起した社会背景について」に於いては、実際に大乘菩薩を生み出した、その社会的背景の面から考察せんとするものである。以下はその内容について少しく述べることにする。

まず、大乘菩薩の起源を考察するにあたっては本生思想（ジャータカ）を思いおこさねばならない。本生談は比較的初期の時代にすでに成立していたと考えられる。

即ち仏滅百年頃（仏滅年代の説はいろいろあるが、ここでは紀元前三二六年の宅井説をとる。）においてその萌芽が見られ、またそのころ第二結集が行なわれ、四阿含五部に阿含系統の經典が統一されたと考えられるが、本生經類もこれらと平行して、しかもこれとは別の系統をたもちつつ編纂されたと考えられる。

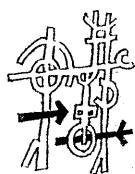
本生談（ジャータカ）とは承知の如く、釈尊の成仏以前の修行時代の姿を今生だけでなく、前生にまでさかのぼって考え、これを称えるうとしたもので、譬喩文学、

大事、律等と密接な関連性を有しながら發達したと考えられる。ジャータカは初期において単に釈尊個人の前生の修行の姿を称えるものにすぎなかった。しかし、本生思想が發達するに従つてその思想内容は深められ、ついに釈尊の前生の姿という名のもとに、実は本生思想を形成し、これを称えんとした人々の自己自身の人間性を追求する述道者の姿を代表せるものとして探究されるようになった。この様に、彼等は、釈尊が一切衆生を代表せるものであり、それはそのまま自己を追求する求道者の姿を代表せるものであるとする人間中心的立場に立つて考察するようになった。従つて、彼等自身「法を現等學」することによつて仏陀も長い間修行することによつて成仏された如くに、彼等も無限の年月ののちには、仏陀と同時に成仏できると考えるようになり、しかもそれは、自己の苦をのがれるためではなく一切衆生救済のためであり、そのためには、自らすすんで、流転せる苦海の中に趣かんとするに到るのである。

ここに於いて、菩薩は単に本生談に説かれる釈尊の過去の修行の姿を表わす影法師的存在ではなく、現在も活

役せるもの、或いは未来に活躍せんとするもの等無数の菩薩が各々の個性を有し、人格を有する大乘の菩薩として説きだされた。

この様に、アビダルマが人間の究極の目的は成阿羅漢であつて仏陀と明確に区別し、しかもそれは出家者中心にとかれたのに対して大乘の菩薩思想は出家、在家を問わず一切衆生すべて成仏まがいなしとする高い立場に立つて人間というものを考察せんとしたのであつた。そして大乘菩薩の具体的実践道として六度が説かれ、これを修して一切衆生のためにならずや成仏せんとする決意を表わすものとして誓願の思想が新たに説きだされ、西紀一〜二〇にかずかずの大乘經典が経纂され、華嚴大本、大品般若の出るにおよんで、大乘の菩薩思想は一応完成されたのである。



「肇論」に於ける般若思想の考察

仲 野 禪 祐

鳩摩羅什門下の四哲と称される一人に僧肇がある。長安の貧困な家庭に育つた彼は自らその生計を助ける為、書物の筆写修理に雇われ、それに専心する内に彼の生れながらの秀れた才能をして經史等の古典に通じ、殊に老莊を愛好する様になつた。しかしこの老莊に於いて尚、心に万足出来ぬ点があり、後に支謙訳の維摩經を見てこれぞ帰すべきものなりと感激し出家して大乘經のみならず小乗の三蔵にも通ずる様になつた。のち羅什に師事した僧肇は、羅什によつて導入せられた印度の般若系大乘教學をつぶさに教授せられ、当時老莊玄学の「無」の思想と般若の「空教義」とを論究するに盛んであつた格義仏教に対し、あるいは中国仏教思想界に対して羅什によつて得た自己の確信を述べるに至つたのである。かゝる彼の論述を集めたのが、「肇論」である。肇論は四篇の論文即ち「物不遷論」、「不具空論」、「般若無知論」